

紫草（ムラサキ）をたずねて
<吉野ヶ里と金印から見てきたもの>

1. 紫草は絶滅危惧種である

四千五百首余りの万葉集に度々登場する程、紫草は魅力ある植物である。
紫は灰さすものぞ^{つぼ いち}海石榴市の八十^{ちまた}の衢に逢へる子や誰（巻十二）作者不明
あかねさす^{むらさき}紫^ね野行き^{しめね}標野行き野守は見ずや君が袖振る（巻一）額田王

紫草と書いて「ムラサキ」と読む。中でも「灰さすものぞ・・・」では、紫草からとれる染料には椿の灰を加えるのが良い、と歌われている。紫草の花は白くて小さく（直径7ミリメートル程）、観賞用としては地味であるが、地中にのびる赤味がかかった紫色をした根「紫根」が重要なのである。根の表面に含まれているシコニンという赤色の色素で、これが染色や漢方の生薬として使用される。



筆者撮影

紫根には硬紫根と軟紫根があるが、染色に使用するのは多くが軟紫根であり、漢方として使用されるのは、日本薬局方で定められた硬紫根である。硬紫根の出来る花か軟紫根の出来る花かは、花色のわずかな違いや葉の状態から、専門家が見れば解るそうだ。江戸時代の外科医、華岡青洲が開発した紫雲膏という軟膏の成分は、紫根、当帰、ごま油、豚脂（ラード）、みつろうが使用されている。ひび、あかぎれ、アトピー、やけど、止血、鎮痛、炎症、痔等に効果があり、現在も漢方薬局などで市販されている。

紫草は秋になると地表の茎葉が枯れ、その地中から根を掘り出し、水洗いせずに軽く土を取り除き、乾燥させてから保管する。新芽はこぼれ種から芽を出し育っていく。乾燥させた紫根は堅く棒のような状態なので、そのままでは色は取り出せない。紫根染めは、染色家によって色の取り方や染色方法も異なる。

染液の取り出し方の一つの方法として、

- ①一晩水につけ柔らかくする。
- ②そこに湯を足して白でつくか手でしごきながら染液を取り出す



筆者撮影

③布でこす

②～③の作業を何度もくり返し濃い染料液を取っていく。下準備として媒染剤も作っておかなければならない。これは染料を繊維に吸着させ、色を落ちにくくすること、また発色させるという働きがある。紫根染めの媒染剤として、椿の枝葉を燃やして作った灰の、上澄液から作る「椿灰汁」があり、それを使った紫根染めが最も美しいという。椿の他に枴灰、ミョウバンも使われるが、どれもアルミ分が多く含まれることがポイントである。紫根に含まれる赤色の色素のシコニンと椿の灰に含まれるアルミニウムを混ぜると紫色に変化する。

染色の技法のひとつとしては

- ① 布を媒染剤に浸す -15 分
- ② 染液に浸す -15 分
- ③ 再び媒染 -15 分
- ④ 水洗い

②～④の作業を 6～8 回はくり返す。こうして重ね染めした一番濃い色を「深紫^{こきむらさき}」と言う。紫は染めむらが出やすいので、試験染めを数十回とくり返すのはざらである。気温が高いと色素が変化してしまい、良い色が出せなくなるので、最も寒い 1 月～2 月に行われる。しばらく寝かせておくことも大切な過程である。紫根本来の良さと味わいを出す為には、2 カ月～4 カ月かかることもある。伝統工芸展に出品される製作者の中には 8 年もの歳月をかけ、研究に研究を重ね、やっと納得のいく作品を仕上げる方もおられるそうだ。

「植物染めは自然界から色をいただく。自然の中にひそんでいる美しい物を引き出して染めさせていただく、という謙虚な気持ちで作業することが大切です。染色には染めた人の人間性が表れる」と、どの染色家の方も話しておられる。

ところで推古天皇の時代 603 年に、聖徳太子によって冠位十二階制度が制定され身分で衣服の色が決められ、「深紫」は最高位の色とされた。685 年天武天皇の時代に「朱華色^{はねずいろ}」（紅花染め）が上位になった時期もあったが、701 年に改正があり再び紫が上位になり、それは奈良平安時代へと続く。平安時代に書かれた源氏物語は、紫にゆかりのある名前が多く「紫のものがたり」とも呼ばれている。光源氏の衣装を再現された染色家によると、紫根をたっぷり使用した衣装があるそうだ。植物染めは 2000 年も前の弥生時代に始まったとされるが、その技法は、冠位制度が出来た飛鳥時代には既に確立していたと思われる。

延喜式によると、かつて紫草は日本全国に分布していた。特に大宰府、武蔵、相模、信濃、出雲、常陸、下総などに多く自生していた。大変貴重なものなので「税の調副物」として役所に納められ、京の都に運ばれて行った時代もあった。

だが現在、紫草は絶滅危惧種となってしまった。紫草は生育条件が難しい。水はけの良い土、日照条件、温度、病害虫の影響が非常に大きく、環境の変化に弱いので発芽しにくい。花には匂いがないので虫が寄って来ず、こぼれ種で増えることになる。そのため、山野の管理は重要だったのだが、それをせず土地開発の工事が行われ、草地が無くなってしまった。雑草と間違えられ刈り取られ、抜かれてしまったかもしれない。貴重なものなので、見つけられ、乱獲されてしまったかもしれない。生育環境は厳

しかつたのだ。それにも関わらず、染料・薬用として使用するには大量の日本紫草を必要とする。

近代になって、ヨーロッパや中国から病害虫にも強い丈夫なセイヨウムラサキが輸入され、栽培種として育てられてしまった。そのため日本古来の紫草との雑種となったものも多いと言われる。残念なことにセイヨウムラサキの根には紫の色素が含まれていない。あつてもごく僅かしかないのである。薬効成分もほとんど取れない。日本古来の紫草を残すために、東京国分寺の万葉植物園では種のDNA鑑定をしてから種蒔きをしていると伺つた。100粒蒔いても3粒芽が出れば良い方だと話しておられた。次世代のためにも日本古来の紫草と外来種を見分ける科学的な方法がないか、研究が進められているようだ。

2. 森林公園の紫草栽培

調査の協力をお願いしてあつた、埼玉県滑川町にある国営武蔵丘陵森林公園・都市緑化植物園を訪ねた。

ここは明治100年事業の一環として、昭和49年に開園した国営公園である。東西約1キロメートル、南北約4キロメートル、面積約304ヘクタール（約90万坪）の広大な土地の一角で、注意深く大切に育てられていた。当日は生憎の雨であつた。事務所からは作業用の軽トラックに乗せられ、奥へと案内された。道の両側には樺の木が隙間なく植えられており、これらは樺灰を取るための木々と思われる。

ここでは一番肝心な土づくりから始まる。赤玉土、腐葉土など排水の良いものが使われる。出来上がった土は艶やかで素手で触れるとふかふかして弾力があり、とても気持ちの良いものだった。紫草は寒冷紗を張つた中で、すのこの上や棚の上で鉢で管理されているもの、育苗箱の中で管理されているものを見ることが出来た。ただ大量に収穫するには露地栽培が適しているそう。収穫された紫根は軽く土を除き乾燥させてカビが発生しないように注意深く保存する。採取した種子は米粒よりも小さく、真珠のように白く、硬く、つやつやしていた。また樺灰を作るための樺の選定枝を軽トラック2杯分燃やしても、僅か18リットル缶1杯分の灰しか取れないそう。

忙しい仕事の手を休めて案内していただき、丁寧な説明をしてくださつた担当の方々には心から御礼を申し上げたい。また、市川万葉植物園の方、国分寺万葉植物園の方、桐生市の染色工房の先生、駒込の染色工房の先生、各方面の皆様から貴重なご指導とアドバイスをいただき、ありがたく楽しい月日であつた。



すべて筆者撮影

3. 神秘の貝紫染め

貝紫染めとは、紫色の色素を持つ、わずか3～5センチメートルの貝（イボニシ、アカニシ等）から採ったパープル腺で染めたものを言う。ごく簡単に説明すると貝の身の中に細長い黄色い部分（パープル腺）があり、この黄色が空気に触れて酸化すると紫色に変化していく。染色方法としては、パープル腺を貝から取り出し、小皿に集めておく。それを直接布に擦り付けて太陽の光に当て、空気に触れさせる。またはパープル腺を食塩水で薄めた中に布を浸して、日光に当てる方法等、他にもあるらしいが、どれも細かい作業工程が必要である。貝の中身は食べられるので身を取り出す作業の中で、色の変化に気付いたのではないかと思われる。



外国では中南米のアンデス古代文明に遺品があり、地中海地域では東海岸が貝紫染めの発祥の地とされている。かの有名なクレオパトラが、舟遊びに使った舟の帆はこの貝紫染めといわれるが、おそらく膨大な数の貝が使われたのだろう。また古代ギリシャでは貝紫染めは大変貴重なもので、帝王の服の色として尊ばれ、権力誇示のために使われていた。



引用：三番瀬水槽管理人の浦安水辺の生き物図鑑

では日本ではどうだったのか。

4. 吉野ヶ里遺跡から出土したもの

吉野ヶ里の広大な丘陵地帯では、みかん園としての開墾や土地整備のための工事が行われ、それに伴って多数の甕棺や貴重な遺物が出土した。そのため日本考古学協会が主体となって発掘調査が急いで実施された。更なる墓地群や遺物の出土、建物跡、河川跡、水田跡、甕棺等々が出土し、研究者たちが注目していた。そして1986年、佐賀県教育委員会によって吉野ヶ里周辺の発掘調査が本格的に行われた。その結果1989年には吉野ヶ里遺跡が発見された。遺跡からは色々な物が出土した。人骨、腕輪、鏡、鉄器、銅剣、木製品、炭化した米等々。その中に、布かどうかさえ確認できない小さな物が見つかった。人骨や腕輪に付着していた物だったが、とにかく小さい繊維片で、色があるかどうかさえ分からない。しかし、その時点での詳しい調査や分析を進め、大学の名誉教授や多くの研究者の努力によって、それが貝紫染めの絹織物であると確認された。富裕層が着ていた物と思われる。高位の人々は袖付きの衣装であったようだ。庶民は頭と腕を出して、腰の部分を縛ったような衣服



であったと想像できる。この繊維片は弥生時代中期～後期前半の甕棺の中から見つかった物であり、それは日本最古の貝紫染めと思われる。吉野ヶ里近くの有明海で採れる貝はパープル腺を持っている。

吉野ヶ里遺跡から繊維片が発見されるまで、日本では動物性の紫染めは認識されていない。何故だろう。染色に使われる天然繊維には植物性、動物性、鉱物性の三種があるが、紫染めは植物性を利用するもの、と考えられていたからではないだろうか。

5. 金印と紫授

志賀島で発見された金印の実物を、どうしても実際にこの目で見たいという思いが募り、1人羽田から飛行機に乗り、福岡市博物館へ直行したことがある。それは想像より遥かに小さく、青白い光の中に守られていた。

金印が本物か偽物か、なぜこの島に埋められていたのか、阿曇族とこの島の関係など、専門的なことは研究者に任せるとして、私の調査結果を述べてみたい。

金印は江戸時代1784年（天明4年）2月23日、志賀島で偶然発見された。「発見者甚兵衛の口上書」なる物があり、甚兵衛が発見者と伝わっている。しかしよく調べてみると、甚兵衛とは、別の集落からその農地を管理していた地主と思われる。あるいは商人かもしれないとの説もある。やとい人に秀治と喜平という小作人がいた。その2人の小作人が、田んぼで野良仕事をしている時に、偶然見つけた物が金印だった。立場上、地主である甚兵衛に話し、甚兵衛が奉公所に届けた。その時点で「甚兵衛の口上書」となったのではないか。（文献によっては別の見解もある）

口上書の中に「貳人持程之石有之」という記述がある。竹内淳子氏によると「2人で持つことの出来る程度の石」ということである。つまり、1人では持てないが2人で抱えれば持てる程度の、目印になる位の大きさの石ではなかったか。さらに金印に傷が付いていないことから、研究者達の間では、何かの入れ物の中にあったのではないかと考えられていた。

当時、奴国では内乱が続き、王は自身への危険を察して、2人の家来に組ひものついた金印を志賀島の海の近く、遠方の奴国を望むことのできる場所へ隠すよう指示したのではないか。後に、そこは志賀島の叶ノ崎という場所となっているが、正確な地点は分かっていない。発見されるまでに時代は進み、土地の形状も変化したであろう。場所を特定するのは困難な作業だったに違いない。現在は公園に整備され、金印の記念碑が建ちモニュメントもある。

漢の時代、金印のつまみの穴に組ひもを通して紐を腰に巻き、印は懐に入れていた。重要な文書を発信する時に粘土で封をし、その上に印を押す。開封されない為である。

後漢書東夷伝によると、建武中元2年、奴国の使者が貢物を持って漢の光武帝へ挨拶に行った。光武帝からは印綬を与えられた。「印」とは金印のこと。「綬」とは組ひものことである。さらに別の文献「翰



イラスト AC

苑」の中で「中元之際、紫綬之榮」とあり、「紫綬」つまり組ひもは紫であった。魏志倭人伝の中にも「金印紫綬」という記述が出てくる。ちなみに卑弥呼に下賜した「親魏倭王」の金印は、どこにあるのだろうか。

中国の古代印章には決まりがあった。虎、亀、ラクダなどの型が金印のつまみ「鈕」として作られていた。当時中国から見て倭の国の位置が分からず、北方を意味するラクダと同方向ではないかと勘違いしてラクダの鈕を作った。ところが、調査後反対方向の南方であることが判明したので、急遽ラクダの上から蛇に改造したのではないかとの説がある。発見された金印の鈕がすっきりした蛇に見えないところから出た説であろう。つまり、紫の組みひもをつけた蛇のようなつまみのある金印を、奴国の使者に与えたことになる。

金印発見の際、他の付属品は見つからなかったとされている。だがもしも、組ひもの繊維らしき存在が確認されていたら、金印の真贋論争は違った形になっていたかもしれない。現在、多くの学者が考証・研究を進めた結果、科学的測定によって本物とされている。なぜ志賀島から出土したかは、竹内淳子氏の著書を参考にした私の想像でしかない。奴国の王、志賀島、阿曇族、これらの関係は専門家による説明が待たれる。



6. 旅を終えて

紫草に関する報告はまだ沢山あるのだが、全部は書ききれない。自然界からいただく植物の色は貴重で、繊細である。特に紫根染めは手間がかかり、地道な作業を必要とする。しかしそれらの作業は、染色の原点と言っても良いのではないだろうか。吉野ヶ里遺跡や金印にまで調査が進むことになるとは想定外だった。

末筆にはなったが、「紫をたずねる」にあたりご協力いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。

<終>

参考文献

『延喜式』（巻十四）

『紫・紫草から貝紫まで』（竹内淳子著・法政大学出版局）

『華麗 優雅 にっぽんの色を染める』（講師・吉岡幸雄 NHK出版）

『草木染』（山崎和樹編・著 山と溪谷社）

『万葉集』（池田彌三郎・世界文化社）

『草木染めの天然色工房 tezomeya』 <https://www.tezomeya.com/>

『邪馬台国と卑弥呼』（瀧音能之監修・宝島社）

『後漢書』東夷伝（まねれきドットコム）<https://manareki.com/>

『翰苑』（東亜古代史研究所）https://www.eonet.ne.jp/~temb/8/kan_en.htm

調査協力

『国営武蔵丘陵森林公園・都市緑化植物園』

『市川万葉植物園』

『国分寺万葉植物園』

『群馬県桐生市の染色工房 天然染色研究所』

『東京駒込の染色工房 布礼愛』

『漢方専門 安心堂薬局』

以上

「古事記」から

大国主命が、出雲から大和国に旅する時に、須勢理毘賣命すせりひめのみことに向かって歌った歌
(着て行く衣服の色を選ぶ場面)

ぬばたまの 黒き御衣みけしを まつぶさに 取り装よそおひ 沖つ鳥むな 胸見る時 はたたぎも これは適ふさはず
辺つ波へ そに脱うぎ棄すて 鳩鳥そにとりの 青き御衣みけしを まつぶさに 取り装よそおひ 沖つ鳥むな 胸見る時 はたたぎ
も 此こも適ふさはず 辺つ波へ そに脱うぎ棄すて 山縣やまがたに 蒔まきし あたねつ春はるき 染木そめきが汁じゅうに 染め衣こもを ま
つぶさに 取り装よそおひ 沖つ鳥むな 胸見る時 はたたぎも 此こし宜よろし いとこやの 妹いもの命みこと 群鳥むらとりの 我われ
が群むられ 往いなば 引ひけ鳥とりの 我われが引ひけ往いなば 泣なかじとは 汝なは言ことふとも 山處やまとの 一本ひともと薄すすき 頂傾うなかぶ
し 汝なが泣なかさまく 朝雨あさあめの 霧きりに立たむぞ 若草わかしの 妻みの命事ことの 語言かたりごとも 是こをば と、うたひ
たまひき。

口語訳

黒い衣装を丁寧に着こんで、沖の水鳥のように胸元を見ると、鳥が羽ばたくように、袖を上げ下げしてみると、これは似合わない。岸に寄せる波が引くように後ろに脱ぎ棄て、今度はかわせみの羽のような青い衣装を丁寧に着こんで、沖の水鳥のように胸元を見ると、鳥が羽ばたくように、袖上げ下げしてみると、これも似合わない。岸に寄せる波が引くように後ろに脱ぎ棄て、山畑に蒔いたあたねを白で春き、その染め草の汁で染めた衣を丁寧に着こんで、沖の水鳥のように胸元を見ると鳥が羽ばたくように袖を上げ下げしてみると、これはよく似合う。いとし妻の君よ、群鳥が飛び立つように、私が大勢の供人を連れていったならば、引かれてゆく鳥のように、私が大勢の供人にひかれていったならば、あなたは泣くまいと強がって言っても、山の裾すそに立つ一本ひともとの薄すすきのようにうなだれて、あなたは泣くことだろう。そのあなたの嘆なげきは、朝の雨が霧となって立ち込めるように、嘆きの霧が立ち込めるのであろうよ。いとし妻の君よ。－これを語り言としてお伝えいたします。

と、お歌いになった。